

Title	英語圏における円地文字に関する研究
Author(s)	ジェスティコ, ゴーイ
Citation	詞林. 2000, 28, p. 56-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67460
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

英語圏における円地文子に関する研究

ゾーイ・ジェステイコ

日本文学の専門家ではない日本人で、円地文子という名前を知っている人は、そう多くはない。円地氏は一九〇五年に生まれ、一九二五年から一九八六年の死去まで二五〇本以上の小説、評論、古典の現代語訳などを書いた作家であったが、現在では、女流文学賞受賞作品「ひもじい月日」(一九五四年)を含む短編小説集^①と、野間文芸賞を受賞した「女坂」^②(一九五七年)を除くと、円地文学は全部絶版になっている。日本における研究では、円地文字論と呼べるものは少なく、参考文献も、多くは全集の解説または書評という形で発表された雑誌記事である^③。

しかし、英語圏では、一九八〇年に「女坂」が「The Waiting Years」という題で英訳されてから、円地氏の作品は英語圏の日本学者の興味を引き、様々な作品が英訳された。最新の翻訳は、今年「A Tale of False Fortunes」という題で発行された「なまみこ物語」の英訳である。その背景にあるのは、英語圏で増えている日本の女流文学、またジェンダー学に対する関心である。一九八二年に日本の女流文学のアンソロジーが三

冊以上発行され、それをきっかけとして、多数の女流作家の作品は英訳され、学界で議論された。現在では、円地文学、特に「女面」と「女坂」は多くの大学の日本文学課程で学ばれている。その傾向に伴って、一九八〇年に発行されたYoko McClainの「Eroticism and the Writings of Enechi Fumiko」という雑誌の記事から、今年発行されたNina Comyzetの「Dangerous Women, Deadly Words: Phallic Fantasy and Modernity in Three Japanese Writers」にわたるまで、色々な評論、紹介などが英語で発表され、日本の論文を補足している。

英語圏における円地研究の先駆的な評論は、一九八〇年に発行されたYoko McClainの「Eroticism and the Writings of Enechi Fumiko」であった。同じ年には、「女坂」が英訳され、円地氏は初めて英語圏で話題になった。しかし、McClain氏がいうように、「女坂」は、写実的な小説で、女主人公は封建的な倫理を守るという点で、円地氏の代表的な作品だとは言えない。多くの円地文学では、写実と幻想が結び付いており、女主人公は例えば若い男性を魅了することで、「良妻賢母」という伝統的な道徳に反抗する。McClain氏によると、円地氏は「女坂」を書いてから自信を得て、読者の反応を気にしないで、本来書きたかったことを書くようになったそうである。この論文では、McClain氏は写実と幻想が結び付いている「二世の縁 拾遺」(一九五七年)、「遊魂」(一九七〇年)、「探霧」(一九七五年)という三つの作品を紹介し、その作品に見られる

女性の性欲の描写を分析する。McClain氏は円地氏が一九五九年に書いた『女の秘密』という論文を取り上げ、これを引用することで、円地氏の性愛を扱った文学を書く動機を分析する。『女の秘密』では、円地氏は、女性の立場から性愛について書いている女流作家には、心の中にある必要が動機となつて書いている作家と、読者を楽しませるように書いている作家の二つのグループがあると述べる。McClain氏によると、円地氏自身は前のグループに属しているに違いないという。多くの日本人の学者と同じように、McClain氏は、円地氏が一九三八年に受けた乳房切除、一九四六年に受けた子宮切除と、この手術による女性としてのアイデンティティーの悩みが、彼女の女性の性欲を描く動機であると結論する。また、McClain氏は円地氏が一九六〇年に書いた『女を生きる』という自伝的な論文を取り上げる。『女を生きる』では、円地氏は幼い頃から見ていた歌舞伎の影響を説明する。円地氏は、歌舞伎の影響のため、幼い頃から恋愛を歌舞伎の世界と結び付け、現実にある男女の肉体的な関係とは別のものだと思つていた。McClain氏は、多くの円地文学、例えば『二世の縁 拾遺』、『遊魂』などでは、性愛は現実ではなく、(円地自身に似ていると考えられる)女主人公の幻想の世界で描写されており、これを歌舞伎の影響と結び付ける。『二世の縁 拾遺』、『遊魂』、『探霧』を分析することで、McClain氏は四つの共通の特徴を指摘する。一番目は、古典文学、特に『源

氏物語』の影響である。二番目は、幻想的な性愛の描写である。三番目は、円地氏は性愛そのものより、性愛への衝動に関心を持つていたことである。最後に、円地氏の女主人公は若い男性を欲している年配の女性である一方、その女性を克己心の強い人として描くことで、彼女達の威厳を保つという点である。この四つの特徴を通じて、円地氏は美的価値の高い性愛の文学を書いたとMcClain氏は結論付ける。

一九八六年には、ドイツの学者のNaoko Riegerが 'Enchi Fumiko's Literature: The Portrait of Women in Enchi Fumiko's Selected Works' という博士論文を英語で発行し、これはそれ以後の英語評論にとつて重要な論文になった。Rieger氏は直接円地氏と相談し、円地氏自身が代表的な作品だと考えた『散文恋愛』(一九三六年)、『女の冬』(一九三九年)、『ひもじい月日』(一九五三年)、『女坂』(一九五七年)、『妖』(一九五六年)、『愛情の系譜』(一九六一年)、『遊魂』(一九七一年)、『狐火』、『遊魂』、『蛇の声』の三部作)、『探霧』(一九七五年)という八つの作品を取り上げ、これらの作品に見られる女性の描写について述べた。これらの作品は、円地氏の若い頃から死去する十年前にかけてのもので、それぞれ執筆当時の円地文学の文体を代表すると考えられる。この論文では、Rieger氏は上述した作品を紹介し、その中に見られる女性像を説明し、これを男性優越主義が守る社会に対する反抗と結び付ける。Rieger氏によると、円地氏は執念深く、報復的な性格の女性を描く

ことで、その原因（つまり女性を抑圧する社会）に注意を引くという。Rieger氏の論文はほとんど伝記と書評の形で書かれており、円地文学そのものは深く分析されていないが、それ以前英語圏で知られていなかった作品を紹介し、重要な箇所が英訳されている点で、それ以後のより深い研究に貢献した。

一九八八年には、Van Gesselは円地文学について二つの論文を発表した。一つ目は、円地文子・河野多恵子・高橋たか子・津島佑子の四人の女流作家に関する“Echoes of Feminine Sensibility in Literature”。二つ目は、「なまみこ物語」（一九七二年）に関する“The Medium of Fiction: Fumiko Enchi as Narrator”である。“Echoes of Feminine Sensibility in Literature”では、Gessel氏は「円地氏を“the first woman to establish a clear, sustained literary voice for herself in almost seven centuries”と、女流作家の中で、一番重要な役割を演じた」と述べる。Gessel氏によると、円地氏は、まず、私小説に対して反抗し、また、作品に古典文学を折り込むという点で、女流作家の日本文学に与える貢献を擬人化しているという。“The Medium of Fiction: Fumiko Enchi as Narrator”では、Gessel氏は「なまみこ物語」という小説を取り上げ、円地氏の物語の構造を作る手法を調べる。「女坂」「女面」という、より有名な小説の構造は弱いところがあるせいか、日本でも、海外でも、文学の構造を軸とする円地研究は少ない。「なまみこ物語」では、円地氏は偽

の平安時代の物語を筋に入れ、この偽の物語を通じて、「栄華物語」のパロディーを作り、そこで道長を批判する一方、中宮定子を賛美する。Gessel氏は、この構造を谷崎潤一郎の「春琴抄」と芥川竜之介の「藪の中」に比較し、円地氏も、真実を定めたい筋を用いることで、誠に重きを置く私小説に対して反抗したと分析する。

“Daughters of the Moon: Wish, Will and Social Constraint in Fiction by Modern Japanese Women”（一九八八年）では、Victoria Vernonは樋口一葉・佐多稲子・倉橋由美子・林芙美子・円地文子の文学を分析し、近代日本文学に「refeminisation」（再女性化）という傾向があると指摘する。この「refeminisation」は、優れた女性作家の数百年ぶりの隆盛と、文学に見られる女性像の発展という意味である。“Between Osan and Kaoru: The Representation of Women in The Works of Hayashi Fumiko and Enchi Fumiko”とこう章で、Vernon氏は「ひめじご月日」（一九五三年）、「男のほね」（一九五六年）、「女坂」、「朱を奪うもの」・「傷ある翼」・「虹と修羅」という三部作（一九六〇年）を取り上げ、この作品に見られる女性像を男性作家の文学によく見られる伝統的な女性像と比較する。Vernon氏によると、近代日本文学、特に男性作家の文学では、近松門左衛門の「心中天網島」（一七二〇年）という浄瑠璃に見る「おさん」と「小春」のような女性のイメージがよく見られる。つまり、「おさん」のような日常的な妻と「小春」のような非日常的な遊女

とに極分化された女性のイメージである。例えば、川端康成と谷崎潤一郎の文学を読むと、「おさん」のような女性を無視する、あるいは軽蔑する一方、「小春」のような性的な女性を美化する特徴がある。また、女性の自我を深く描かず、男性の愛の対象として理想化する傾向も見られる。しかし、円地氏は、女主人公の描写で「おさん」の中にある「小春」と、「小春」の中にある「おさん」を描くことで、伝統的な女性像の現実からの距離を強調するとVenon氏は述べる。また、この論文で評論された他の女流作家とともに、円地作品は男性作家の文学に見られる女性像にも重要な影響を与えたと結論する。

一九八九年に発行された“Enchi Fumiko and the Hidden Energy of the Supernatural”とは、Wayne Poundsが「女面」と「二世の縁 拾遺」を分析する中で、円地文学を怪談というジャンルと結び付ける。Pounds氏によると、怪談は徳川幕府の権威主義に対する反抗として読まれ、超自然な話には、実社会以上に自由な世界への欲望が見られるという。同じように、円地氏は「巫女」などの超自然的なモチーフを通じて、積極的な女性の描写をなし、文学で見る伝統的な女性像を否定した。「女面」では、巫女的な女性である「三重子」という女主人公は、亡くなった息子の妻の恋人を超自然的な力で、精神薄弱の娘と結びつけ、その結果、娘は妊娠する。三重子は孫を得、また、姦夫であった夫に復讐できるが、娘は出産

により亡くなる。日本人の学者はほとんど「女面」を復讐というテーマを軸としている作品と読んだが、Pounds氏はこの解釈を否定する。Pounds氏によると、「女面」の一番重要なテーマは復讐ではなく、女性の創造力であるという。「女面」でみられる円地氏の女性の文学についての理論は、女性の作家は巫女のように文学を意思を表現する霊媒として使うとPounds氏は述べる。「二世の縁 拾遺」という上田秋成の「春雨物語」にある「二世の縁」という怪談が編み込まれている短編小説は、ほとんどの評論で男性と女性の性欲を探る作品だと読まれているが、Pounds氏はこの作品を男性作家を中心としている文学界に対する風刺として解釈する。“The common element that characterizes Enchi's concern with the supernatural and the genre of the supernatural tale, I believe, is a concern with the energy latent in traditional distorted images of women and male-female relationships”と、円地氏は超自然を伝統的な女性像と男女の仲の描写を改善するために使ったとPounds氏は結論付ける。

一九九〇年に発行されたJuliet Winters Carpenter（「女面」の翻訳者）の“Enchi Fumiko: 'A Writer of Tales'”は、最初の英語で書いてある円地文子に関する伝記体の論文である。Carpenter氏は円地氏の一生を描きながら、「朱を奪うもの」、「ひもじい月日」、「女坂」、「女面」などの重要な作品を紹介し、その作品のテーマを円地自身の人生と関連づける。例えば、自

伝的な特徴が多いと考えられる「朱を奪うもの」では、女主人公は、江戸時代の文学や近松門左衛門の浄瑠璃に見られる女性に対する虐待を見て、自分を虐待の対象として想像することで、性的な快楽を感じる。Carpenter氏はこの作品を三島由紀夫の「仮面の告白」と比較し、円地自身のエロスについての感情と関連づける。

一九九〇年に発行された“Twin Blossoms on a Single Branch: The Cycle of Retribution in Ornament”で、Doris Bergenは「双子」「仮面」などのモチーフ、また「因果応報」という概念を探ることで、「女面」を深く分析する。これは、英語で書かれた円地文学の評論で、一つの作品に焦点をしばった最初の論文である。Wayne Pounds氏と同じように、Bergen氏は復讐というテーマに重きを置く日本人の学者の解釈を否定するが、Bergen氏の解釈はPounds氏の解釈とはまた違う。上述したように、Pounds氏は筋の裏に見られる女性の創造力というテーマを強調する。しかし、Bergen氏は、三重子のすることは、夫に復讐するより孫を得るためであり、その原因は夫の姦通ではなく、若い頃の流産であると述べる。また、Bergen氏は「女面」を川端康成の「美しさと悲しみ」という小説と比較する。この二つの作品は正面だけを見れば、女性の復讐の話であるが、その復讐の原因は子供の喪失であるとBergen氏は述べる。

一九九五年には、Yumiko Hulveyは“Japan in Traditional and

Postmodern Perspectives”という社会学の教科書で“‘The Intertextual Fabric of Narratives by Enchi Fumiko’”という論文を発表した。この論文の中で、Hulvey氏は円地文子の作品を「intertextuality」（間テクスト性）というポストモダンニズムの文学理論の例として使う。Hulvey氏は「なまみこ物語」「女坂」「男のほね」「妖」「二世の縁 拾遺」「女面」「遊魂」、また、初めて英語圏で研究された「化性」（一九六四年）と「花食い姥」（一九七四年）を取り上げ、その作品で見られる「intertextuality」、つまり、他の作品やジャンル、特に古典文学と「巫女」というモチーフとの関係を探る。五十年代から七十年代までの作品を評論することで、Hulvey氏は円地文学のテーマ、モチーフ、女性像などの変化を辿る。円地文学がどれぐらいフェミニストな文学だと考えられるかどうかは、円地研究の重要な問題点である。Hulvey氏によると、円地氏は西洋文学に詳しくて、その知識のおかげで、フェミニズムが日本で広く知られる前に、この概念を文学で表現させたそうである。Hulvey氏は「intertextuality」という論理を使うことで、円地文学を古典文学だけではなく、吉本ばなな・津島佑子などのポストモダンの女性作家と関連づける。また一九九八年には、Hulvey氏は“Enchi Fumiko's Portal to Desire”で、似ている手法やモチーフがある「浅間彩色」（一九六九年）「春の歌」（一九七一年）「探霧」（一九七五年）と比較しながら、「潜」（一九七〇年）という短編小説を深く分析する。これは、最初

の「潜」に関する評論で、最近の円地研究で見られる七〇年代の作品についての関心を反映する。この論文で Hulvey 氏は「夜這い」という古典のモチーフが折り込まれている「潜」を挙げることで、円地氏が七〇年代以降、「巫女」などの代表的なモチーフを捨て、「夜這い」などの新しいモチーフを実験的に使ったと云う円地文学の論理を打ち出す。

一番新しい円地研究は、去年発行された Pammy Eddinger の 'From Obsession to Deliverance: The Evolving Landscape of the Feminine Psyche in the Works of Enchi Fumiko' と Nina Comyetz の 'Dangerous Women, Deadly Words: Phallic Fantasy and Modernity in Three Japanese Writers' であり、これは「円地研究としては初めてのまとまった一書である。Eddinger 氏は一九二六年の「古里」という劇から一九八四年の「菊児童」という最後の完成された小説まで、円地氏の伝記を書きながら、代表的な作品、また、それ以前には研究されていなかった様々な作品を取り上げ、円地文学の発展を辿る。'From Obsession to Deliverance」(執念から釈放まで)という題で分かるように、Eddinger 氏は、一九六〇年代中頃の円地氏の作品には、男性に復讐する女主人公が多く、消極的な結末が普通であるのに対し、それ以降の成熟した作品では、円地氏は家長制度と女家長制度の間の折衷である社会観を作ったという見解を述べる。特に面白いのは、円地氏が現代語訳した「源氏物語」の分析である。

Eddinger 氏によると、円地源氏、特に注釈では、桐壺・藤壺・(一般的には軽蔑されることが多いが、円地は同情していた)六条御息所の役割が強調されている一方、従順な紫上は軽く扱われているという。このフェミニストな現代語訳を通じて、円地氏は「源氏物語」に登場する女性についての女性差別が入っている伝統的な解釈を否定すると Eddinger 氏は述べる。

'Dangerous Women, Deadly Words: Phallic Fantasy and Modernity in Three Japanese Writers' 及び 'Nina Comyetz は泉鏡花・円地文子・中上健二の文学で見られる女性像を探る」ことで、日本文学でよく見られる「dangerous woman」(危ない女性)という女性像とその原因を分析する。マティリアリスト・フェミニストである Comyetz 氏は、Julia Kristeva、Judith Butler などのフェミニストの学者、Jacques Derrida、Michel Foucault などのポストモダンニズムの学者、また、Sigmund Freud と特に Jacques Lacan という精神分析学者の様々な理論を使う。現代日本文学で見られる「危ない女性」という女性像、例えば円地文子の「女面」の「三重子」は、多くの学者によって、永遠の女や日本らしさという概念に関連づけられているが、Comyetz 氏はこれを否定する。むしろ、この複雑な精神分析の解釈で、Comyetz 氏は「危ない女性」を日本の近代化とその近代化に伴う認識論と女性の社会地位の変化に関連づける。この本は日本語に翻訳される予定があるという。

以上簡単に紹介したように、英語圏における円地文子につ

いての研究は、特にここ数年かなり進歩し、この傾向は当面続きそうである。英語を母国語として話す人に、円地文子の作品や文学の理論を紹介する価値はもとより、西洋の理論を使って評論する点で、この研究は日本の研究を豊かにする可能性もあり、日本人の学者も目を向ける必要があるだろう。

注

- (1) 円地文子 『妖・花食い巻』>『講談社文芸文庫』(講談社・一九九七年)
- (2) 円地文子 『女坂』(新潮社・一九九七年)
- (3) 『明治・大正・昭和作家研究大辞典』(桜楓社・一九九二年)

英語に翻訳された円地文学

- 'Masks' (『女画』) Winters Carpenter, Juliet 訳, Vintage Books, New York, 1993
- 'The Waiting Years' (『女坂』) Bester, John 訳, Kodansha International, Tokyo, 1980
- 'A Tale of False Fortunes' (『オホキキ』物語) Thomas, Roger K. 訳, University of Hawaii Press, 2000
- 'Boxcar of Chrysanthemums' (『箱車』) (Tanaka, Yukiko & Hanson, Elizabeth 譯 'This Kind of Woman: Ten Stories by Japanese Women Writers 1960-1979'), Stanford University Press, 1982
- 'Love in Two Lives: The Remnant' (『二重の戀 奇譚』) (Mizuta Lippitt,

- Noriko & Selden, Kyoto Iriye 編 'Stories by Contemporary Japanese Women Writers'), M.E. Sharpe, Armonk N.Y., 1982
- 'Enchantress' (『妖』) Bester, John 訳 (Seidensticker, Edward, Bester, John & Morris, Ivan 譯 'Modern Japanese Short Stories'), Asahi Shinbun Publishing Company, Tokyo, 1960
- 'Skeletons of Men' (『男の骨』) Matisoff, Susan 訳 ('Japan Quarterly' 35-4), Asahi Shinbun Publishing Company, Tokyo, 1988
- 'Blind Man's Buff' (『くらげの謎』) ('The Mother of Dreams'), Kodansha International, New York, 1980
- 'The Flower Eating Cone' (『花食い巻』) ('The Oxford Book of Japanese Short Stories'), Oxford University Press, 1997

参考文献

- Bargen, Dorts G. "Twin Blossoms on a Single Branch: The Cycle of Retribution in Onnamen" ('Monumenta Nipponica' 46-1, 1991) Sophia University, Tokyo
- Cornylet, Nina. 'Dangerous Women, Deadly Words: Phallic Fantasy and Modernity in Three Japanese Writers', Stanford University Press, 2000
- Edlinger, Panny Yue. 'From Obsession to Deliverance: The Evolving Landscape of the Feminine Psyche in the Works of Enchi Fumiko', Ph.D Thesis, Columbia University, 1999
- Gessel, Van C. 'Echoes of Feminine Sensibility in Literature' ('Japan Quarterly' 35-4), Asahi Shinbun Publishing Company, Tokyo, 1988
- Gessel, Van C. 'The Medium of Fiction: Fumiko Enchi as Narrator' ('World Literature Today' 62-3, 1988)

- Huivey, Yumiko. "Enchi Fumiko's Portal to Desire" (*Japanese Studies Review* Vol 2, May 1998)
- Huivey, Yumiko. "The Intertextual Fabric of Narratives by Enchi Fumiko" (Fu, Charles Wei-Hsun & Steven Heine 編 'Japan in Traditional and Postmodern Perspectives'), SUNY Press, 1995
- McClain, Yoko. "Eroticism and the Writings of Enchi Fumiko" (*Journal of the Association of Teachers of Japanese* 15-1, 1980)
- Pounds, Wayne. "Enchi Fumiko and the Hidden Energy of the Supernatural" (*Journal of the Association of Teachers of Japanese* 24-2, 1989)
- Rieger, Naoko Alisa. 'Enchi Fumiko's Literature: The Portrait of Women in Enchi Fumiko's Selected Works', *Gesellschaft Fur Natur/Volke-kunde Ostasiens*, Hamburg, 1986
- Vernon, Victoria. "Between Osan and Kaoru: The Representation of Women in the Works of Hayashi Fumiko and Enchi Fumiko" ('Daughters of the Moon: Wish, Will and Social Constraint in Fiction by Modern Japanese Women'), University of California, Berkeley Press, 1988
- Writers Carpenter, Juliet. "Enchi Fumiko: 'A Writer of Tales'" (*Japan Quarterly* 37-3), Asahi Shimbun Publishing Company, Tokyo, 1990

(Zōe Jeshico 本学大学院博士前期課程)